

バレイショ品種の作型、種いもの齢の違いによる生育特性

向島信洋・石橋祐二¹⁾・中尾 敬・森 一幸
 (長崎県総合農林試験場愛野馬鈴薯支場・¹⁾長崎県総合農林試験場)

Nobuhiro Mukouzima, Yuuji Ishibashi, Takashi Nakao and Kazuyuki Mori :
 Growth Characteristics by Cropping Type and Difference Age of seed potato

ばれいしょは長崎県の主要作物で生産量は全国第2位である。特に北海道産の端境期である春の5～6月を中心に出荷されている。

生産現場では多くの作型に分化しているが、最も多いのは春作マルチ栽培で、北海道産の種いものが多く使われている。

当支場では昭和1951年以降、暖地二期作栽培に適した品種の育成にとりくんでいるが、長年にわたり露地栽培による選抜・育成を行ってきた。しかし、1995年より露地栽培と平行して現場の作型に適合したマルチ栽培での試験も実施し、2002年よりマルチ栽培のみに移行した。

その間、バレイショ品種の作型および種いもの齢の違いによる生育特性について得られた知見を紹介する。

1. 材料および方法

1) 作型の違いによる生育の特性

春作マルチ栽培、露地栽培に「デジマ」, 「ニシユタカ」の県内秋作産温蔵種いも(以下温蔵)を用い、生育期間中10日おきに10株2反復で掘り取り調査を行う生育追跡試験, および40株3反復の生産力検定調査を実施した。

2) 種いもの齢の違いによる生育特性

春作マルチ栽培に「デジマ」, 「ニシユタカ」, 「普賢丸」の温蔵および北海道産種いも(以下道産)を用いて生育追跡調査を実施した。

2. 結果および考察

1) 作型の違いによる生育の特性

地上部の生育は、気温が比較的高い時期に生長する露地栽培がマルチ栽培より茎長が高くなり、特に熟期が遅いデジマでは著しかった。上いも重(収量)は、露地栽培での生育後半に好天に恵まれた1995年などの特異年を除くと、おおむね露地栽培よりマルチ栽培が上回り、澱粉価はマルチ栽培が高かった。これは、マルチ栽培の方が土壌水分が安定していることと露地栽培の収穫時期が梅雨により多湿になりやすいことの影響だと思われる(第1図)。

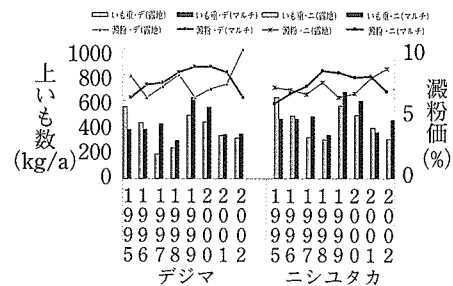
2) 種いもの齢の違いによる生育特性

いも数は生育期間をとおして道産が温蔵を上回った(第2図)。平均1個重は、出芽が早い道産が塊茎肥大初期から中期までは大きいですが、その後は温蔵が大きくなった(第3図)。上いも重は品種間差がみられ、「デジマ」「普賢丸」は生育中期まで道産が多かったが、その後温蔵に逆転された。「ニシユタカ」は道産が終始多収であった。しかし、年次間差がみられるため、さらなる調査が必要である。

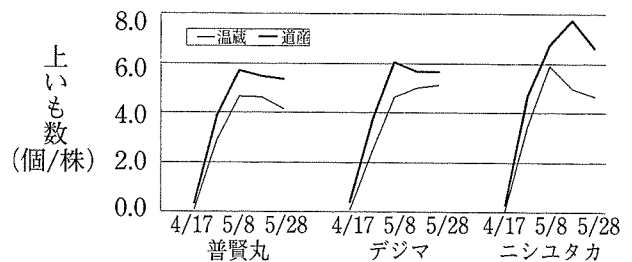
澱粉価は生育のステージが早い道産が高く推移するが、温蔵の収穫適期になると大きな差はみられなかった。

また、「普賢丸」は温蔵を使用した場合、塊茎の肥大が早く、早期肥大性を発揮した。しかし道産の場合、齢

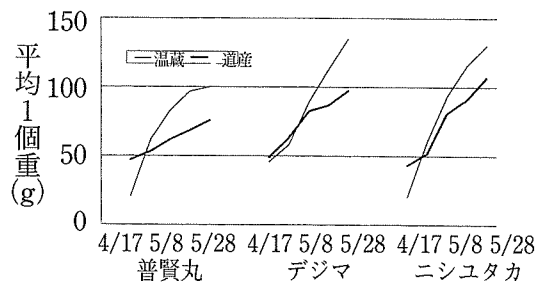
の進んだ種いも使用によりいも数が多くなったため1個当たりの肥大が鈍くなり早期肥大性は発揮されなかった(第4図)。新品種を現場へ早く普及させるためには秋作温増産とあわせて一期作産種いも(道産等)を使用した生育特性の把握が必要である。今後、有望系統については調査を継続し、栽培現場への新品種の早期普及につなげたい。



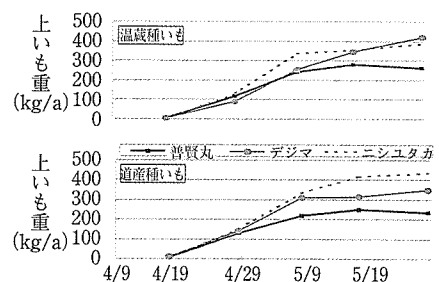
第1図 作型の違いによる上いも重・澱粉価(1995~2002年)



第2図 種いもの齢の違いによる上いも数の推移(1997~1998年の平均値)



第3図 種いもの齢の違いによる平均1個重の推移(1997~1998年の平均値)



第4図 種いもの齢の違いによる上いも重の推移(1997~1998年の平均値)